

ヒアリング日：2019年11月14日

文章完成日：2019年12月30日

佐々木：今日はよろしくお願ひいたします。

田原：よろしくお願ひいたします。

佐々木：天文台に入った理由、あるいはきっかけはなんでしょうか、どうして研究者になろうとしたのですか。

田原：東京天文台に入る前は学術振興会の研究員として立教大学にいました。その時、今は助手のポストがないけれど、空く予定なので、しばらくは定員外だが、来てくれないかと誘いがあったんです。それで天文台に勤め始めたということです。4ヶ月ぐらい経ってから正式に助手に採用されました。勤め先は宇宙電波部で、通称「ミリ波」というところなんです。

研究者になろうとしたのは、学部の時、大学院に進むか就職するかという選択肢の中で、研究の方が面白そうだということで、大学院に進学することにした。その当時は大学院に行って素粒子物の研究をやりたいなと思っていたので、しばらくそちらの勉強をしていたんですけど、いろいろと勉強するうちに素粒子物理学の面白さがなくなった。その一方、天文学分野では新しい天体、例えばクエーサーやパルサーと言う謎の天体や強いX線を出す天体、さらに宇宙黒体放射という、それまで誰も知らなかったような天体が続々と発見されるという、新発見の時代を迎え、今からは宇宙の研究をやった方が面白いのではないかと武谷三男先生の助言もあり、方向転換しました。

もともと、天文学ということですけど、もともと物理出身ですので、物理学の立場からアプローチしていくのが面白いんじゃないかということで、博士課程では研究テーマとして、クエーサーや電波銀河の研究を始めました。そもそもは物理出身ですから、理屈を考えるということだったんです。

先に話したように、天文台に勤めるきっかけは、宇宙電波部の森本（当時は助教授）さんからの声が掛かっていたからですが、私のやっている研究分野は、国内では他に研究者がいなかったということもあったのではないのでしょうか。研究は理屈の話でしたが、研究対象の天体が強い電波を出すということもあって、それなら理屈だけではなくて、天体自体の観測研究も面白いんじゃないかなということもあって、三鷹と申しますか、東京天文台での研究を始めたということです。そこからはどちらかと言ったら研究は観測を中心の電波天文学の道を進んでいったということです。電波天文学といっても、観測するには東京天文台の装置では出来ないというので、鹿島にある電波研究所の望遠鏡を電波観測用に改修して、しばらく観測した時期があります。わが国の電波天文学というのは世界から随分遅れていたんですよ。三鷹では6メートルという小さい望遠鏡があり、ミリ波という短い波長で性能が良いという特徴があって、星間分子ではかなり世界的な研究がやれてはいたんですけど、それだけでは、世界と太刀打ちできないし、銀河系の外、宇宙の果ての天

体を観測することは不可能でしたので、電波天文学に関わりたいと思う研究者の要望は、もっと大きな電波望遠鏡を作りたいということですね、そういう動きがあってそれを進める核に天文台の「ミリ波」グループが関わっていった。しかしそのグループの要求だけで大きな装置が出来るわけではない。国内の多くの研究者が支えるということが大前提ということで、電波天文に関わる全国の研究者による宇宙電波懇談会を組織し、その総意のもとに進めたわけです。東京天文台というよりは、日本の電波天文学をどういう風に進めていくか、そのための核としての大型宇宙電波望遠鏡という位置づけになっていた。

佐々木：発祥地だったのですか

田原：そうです、元々の発祥地は三鷹の6メートル電波望遠鏡ですけども、そこはある意味で踏み台にして、もっと大きく世界のトップを狙おうと、今から考えればすごく無謀な計画だったんですよ。だから当然天文台の中でも、そんなものできっこないと冷ややかだった。

佐々木：そうだったのですか。

田原：もうその頃になると、私は宇都宮大学の方に移っていたんです。宇都宮大学に行くのは、ミリ波の中で、賛成の人も反対の人もいたんですが、とにかく宇都宮大学に行っても、比較的近いので、天文台の仕事と大学の仕事を両股をかけてやれるだろうということでした。

佐々木：そうすると宇都宮大に移った理由というのはそこに関係あるのですか。

田原：なぜ宇都宮大に行ったかというのは、どこでもいいということではなかったんですね。一つは電波天文学を全国的に広げるためには、なるべく外に出て行くことも必要なんですね。天文台に留まっているんじゃないくて、広げていくという意味で外に出て行く。たまたま近くの宇都宮大で新学部計画があり、その中に宇宙物理分野を作りたいのでとの誘いがあったのです。その計画はとん挫しましたが、行く決心は変わらなかったのです。外に出ていくといっても、天文台と遠く離れていたのでは、困るという事情があったのです。宇都宮は比較的天文台に近いというのが理由です。もっと遠い大学だったら多分行かなかったでしょう。

とにかく、天文台の仕事と宇都宮大学の仕事を両立するんだったら行った方がいいんじゃないかということの中で行ったのです。後から考えてみると大きな装置を作るのは全国の研究者が利用できるようなシステムにしないといけない。ということになると、やっぱり外の立場から物が言える人が必要なのです。私が良かったのは、天文台にいたことで、天文台の事情をよく知っていること、それから外に出ているので、外の立場も理解できる。両方を十分に理解しているという意味では、極端に言うと唯一の人間だったんです。

佐々木：器用だったんですね

田原：私の役割は、電波望遠鏡の建設というよりは、電波望遠鏡がその性能を発揮し、我が国の宇宙電波研究の発展につながる仕組みの実現です。そのためには、観測所の運営システムをどう構築していくかが私に期待されている課題でした。要するに全国の共同利用施設の模範的なものを作ろうということが私の目的でした。外の立場から考える方が、中の立場で考えるより、外の人にとっては理解しやすい。ということで、私は野辺山望遠

鏡の運営のあり方とか、そこら辺のシステムを作ることがしばらく仕事の中心だったんですね。もちろん宇都宮大での仕事はありましたけれど。

佐々木：研究というのは何なのですか、研究の魅力はどこにありますか。

田原：なかなか難しい質問ですね。今時は、社会の状況が変わったということもあると思いますけど。やはり研究というのは世の中の未知のものを明らかにしていきたいという、そういうことは面白いんじゃないかなということが一つ、それからもう一つは、自分の研究ということではないが、沢山の人が研究に関われるよう、研究環境を良くしていくということも必要ですので、自分の研究の面白さと同時に皆が研究を楽しくできるような環境を作るといっても研究そのものとは関係ないけれども、それもやりがいのある仕事ではないかなという風に思っていました。研究そのものといえば、先ほど言ったように何か未知のものを明らかにしていくために、誰もやらないことに取り組むということが楽しいわけですね。宇宙の果ての不思議な天体の研究を本格的に取り組む研究者は、当時、日本にはいなかったのですから。まあ自然にそういうことになったのかなという気がしますね。

佐々木：それに関連することはもう一度最後の方でお聞きしますが、天文台に入所されてすぐに組合に入ったのですか、組合入るきっかけとか、あるいは生い立ちで何か思い当たるようなことがありますか。

田原：ずいぶん昔の話なのではっきりしたことは言えないんですけど。なんとなくですが、私は組合そのものにはあまり関心がなかったんですよ。ですけど、天文台に就職したら、私たちの周辺の人ほとんど組合員だったもので、助手ぐらいたと組合に入るのが普通なのかなと思って、何の疑いもなく組合に入ったんです。何が動機かという言い方で言えば、そんな主体的な動機ということではなくて、入るのが当たり前だということに入ったということですね。ですから、組合活動とはなにか、あまり知らなかった。入って早々のことですが、当時、早朝ストライキということをよくやっていたんですけど、私はそれがどういうことか知らないで、早朝から9時までストライキというんだから、早く仕事に出てはいけないだろうと思って、わざわざ9時過ぎに天文台に行ったら、集会が終わって皆帰るところだった。

佐々木：本当は集会に参加すべきだった。

田原：そうそう、ストライキというのは、集会をすることなのかと、初めて知った。何かちょっと笑い話のような、無知というか、その程度なんですよ。組合の印象はですね。

佐々木：でも天文台に入ってしばらくしたら委員長をやり、宇都宮大学に移ってもすぐに委員長をやる、どうして委員長を受けたのですか。

田原：これも理由ははっきり覚えていません。天文台に勤めてから1年半とか2年も経っていない内、しかも組合にほとんど関心がなかったのに、なんで執行部を引き受けたのか。ひょっとしたら組合ということあまり知らなかったから、頼まれ気楽に、「ではやりましょう」という感じだったのかもしれないですね。私は組合の役割だとか運動だとかそういうことについては無知に近かったんですけど、大学院の博士課程の頃から、東京地区とか全国の若手研究者、と言っても大学院生が中心でしたが、研究分野を越えて集まり、組織的に学習会とか研究会などに取り組んでいました。

実は、その前から素粒子若手研究者の夏の学校が毎年開かれていました。大学院に入学当時は素粒子研究に興味があったので、夏の学校に参加していました。2年後、東京地区が夏の学校の当番校になり、私もその準備に加わっていました。ちょうどその当時、宇宙線の研究にも興味を持っていたので、宇宙線の若手とも付き合っていました。彼らも若手グループを作りたいと考えていた時期だったので、素粒子若手の夏の学校だけでなく、関連する原子核研究の若手のグループにも声をかけ、宇宙線若手も含めた、いわゆる三者夏の学校を始めて企画しました。そうした経緯もあって、三者夏の学校の事務局長を担当して、その運営に当たりました。

組合の執行部は何をすればよいのかと尋ねたら、要は組織的に皆を動かす役割ということだったのです。大学院の時から、組織的に動かすということには慣れていたということもあり、引き受けたのだと思います。結局やることは、組合員の考えをよく聞いて、その要望を反映させるよう努めることです。また天文台の教職員組合と言っても東大の下ですから、東大の職員組合、いわゆる東職との連携とか、いろいろ連携を必要としていました。私にとっては連携していろんなことをやるというのは得意だったので、ほとんど抵抗なくやれ、あまりしんどいという、そういうことはほとんどなかったですね。自然体でやれたということではないかと思います。佐々木さんにお世話になったのは、その時からです。佐々木：天文台の組合ってというのは技官が中心で結成は古いのですけれども、その天文台の雰囲気、また宇都宮大学の組合の雰囲気、それぞれ構成が違いますけれどもその辺についてどのような印象を持っていますか。

田原：天文台に勤めていた時は、組合というのはこういうもんだなと思うだけで、他と比較ということではなかった。印象としては、技官の人や若い事務職員、女性も含めてですけど、ある意味では虐げられたと言いますか、そういった弱い立場の人達が一生懸命団結して頑張ってるような雰囲気でした。それに助手・講師の人たちも加わった組織で、教授・助教授の組合員もゼロではなかったんですけども、基本的にはそうした下からの要望や意見を反映させたいという動きは強かったと思いますね。

宇都宮大学の場合は、教員が中心で、それに事務職員や行二の人ということだったんです。印象としては、極端に言うと、助教授・教授が中心になって、待遇に恵まれない人のために頑張っているような組合ということでした。だから自分のための運動というよりは、何か下の人のために組合活動をするというような印象が強かったし、皆そんなつもりだったんじゃないですか。要するに自分のためというよりは人の為に頑張らなきゃいけない、というような感じになっていたような気がしていました。かって、私が天文台の組合執行部の時は自分自身の問題として闘ってきたので、宇都宮大でも、自分自身の問題として把握する必要があるんじゃないかという気がしていた。ですから、私が執行部になった時には、なるべく教員中心じゃなくて、4役に、技官や車庫の人にも加わってもらい、自分たち当事者の問題として取り組む、今までの宇都宮大学の組合とは違う方向を目指そうと思いました。そこに、天文台の時の経験が生かされたんじゃないかなと思います。

佐々木：天文台の組合、宇都宮大学の組合、30数年以上組合に携わってきたわけですけど、忘れられない闘争、印象に残っている取り組みはどのようなものがありますか。

田原：これも聞かれてパッと答えるというのは難しいんですけれども。いろいろ思い出ししてみると、天文台の時には、私が執行部に入る前から宿日直が大きな問題で、何のために宿日直をやるのか、なんで技官とか助手だとか下っ端だけが宿日直をやるのか、やらされるのか、というようなことが問題になっていて、廃止すべきではないかという組合としての要求が高まったようです。

そうした運動を続け、当局側と組合側と交渉を重ね、方向としては改善の方向が煮詰まってきた、それを引き受けて執行委員長になったんですね。だからその時には口約束的にはどういう風に収束するかということとはほぼできていたのです。しかし、当局側は組合からの要求があったからこういう風に変更したのだということではなく、自主的にやるんだというようなことにしたいという。組合の要求という形にするのが嫌だったんですね。実質的にはそれでいいのかもしれないのだけど、今後の組合運動のことを考えるなら、当局と対等に交渉し、その成果をきちんと形として残す必要があるというので、規約を作ったり、合意書を作り、それを当局に認めさせて残すということが私たちの執行部の役割だなと思っていました。

佐々木：労働協約ですね。

田原：そうそう、だからそういうようなことは、多分初めてだったと思うんですよ。ですけど、そういう労働契約を残すというのは、別に宿日直の問題だけではなくて他のいろんな事を進める時にも、前例として残るから、契約にして残す方がいいなということ。それからもう一つ、これは組合運動自体のあり方と深く関わっているんですけれども、当局側が宿日直は続けてやりたいということの根拠が極めて曖昧だったということです。私が執行部の時には、宿日直をやるという以上は、意義があるはずでしょうと迫っても、どういう意義があるのかということについて明確に答えない。どちらかといったら組合の方から、こういう意義があるんでしょうと説明し、その意義を重要だと天文台として認めるのだったら、それを助手や技官といった人に押し付けるのでなく、「教授も助教授も含めて皆でやらなきゃいけないんじゃないですか」という話になるわけです。それで結局どうなったかと言ったら、その後はしばらく続いていたのですけれども、なんとなく宿日直が廃止になってしまったのです。おそらく、教授や助教授が宿日直をやってみて、それをしなくても、他にいろいろ代替できると気づいたのでしょう。要するに、宿日直の一番重要な役割は新天体の発見への対応です。例えば、アマチュアの天文家たちから、どの方向に新しい星が見つかったと連絡が来ると、それを受けて確認をし、世界に登録してもらう。その確認が一番大きな仕事だったんですね。肝心なことは、世界で最初に発見したことが証明されればよいので、それだったらもっと別のやり方もあるということで廃止になったんです。要するに、組合は、ただ廃止を主張するだけではなくて、なぜ宿日直が必要か、学問的にみたとき、天文台としての役割は一体なんなのかというような議論をふっかけて、それで闘ったということが重要で、たぶんそれが良かったのではないのでしょうか。

組合運動の中心に労働条件の改善とか待遇改善とかいろいろあるのですが、それは何のためかと言ったら、やはり大学にしろ研究所にしろ社会的責任を全うするためには、どういう職場環境のもとで働くのが良いかということです。組合運動はただ単に働く人のため

というだけではなく、結果として、そこでの研究とか学問とかそういう教育を含めて発展していける環境づくりも一つではないかな、ということを感じますね。

執行部としてやらなきゃいけない通常の組合活動もありましたけれど、なかなかみるべき成果が出せない。成果を上げるためにはどこに重点を置くべきかが大切です。待遇改善と言った場合、単純に言うと、行二の人だとか、行一の場合、特に女性に対する待遇が悪いんです。だから差別するというわけではないんですけど、そこに目標を置く必要がある。女性職員の待遇の問題に関しては、よく調べると、女性の昇格が男性に比べ非常に遅れている現実気づくのです。だから、この遅れを改善することに重点的に力を入れる必要がある。そこにポイントを当てて当局側と交渉することによって、今までなかなか昇格できない人が昇格できるようになり、一定の成果を挙げることができました。該当した女性職員から、「組合のおかげで昇格しました」とお礼の声をかけられると、組合活動は、組合員だけでなく、非組合員にも喜ばれるんだなということも分かり、執行部として活動してよかったという気持ちになります。

宇都宮大学に移ってもやっぱり事情は似ています。例えば、その当時は定員外職員の方が沢山いましたので、そういう人たちのために、力を入れる必要があるし、行二の人たちの場合は単に労働条件だけじゃなくて、働きがいも含めてですね、おろいろと耳を傾ける必要を感じました。そのこともあって、そういった方々と仲良くなれた気がします。

先ほど言ったように、組合活動ということでは、いわゆる待遇改善が一つの柱になっているんですけど、広く言えば、大学全体を良くしていくためには、もっと組合も視野を広げた方がいいんじゃないかということもある。典型的な例で言えば、財政問題です。学内予算配分一つとっても、その予算が国から降り、大学では予算をどういう方針と基準で作る、学部とか部局にどのように配分されて、それを、さらにどのように研究室に配分されるかというような、予算の大きな流れとか仕組みというものを、皆がほとんど理解していない状況だったんですね。これはちょっとおかしいんじゃないかということに気づきます。ただ、この仕組みを個々の教授会で議論するという話でもないだろう。それなら全学的な問題ですから、組合で学習会をしたらどうかというような話が出た。ただ誰も説明できる人はいないこともあって、私が担当することになり、学内予算の勉強を随分したんですね。そのこともあって、大学予算というものに関心を持つようになり、組合とは直接関係がないんですけども、後々いろいろ役に立ったんです。

佐々木 国大協第6常置委員会ですね。

田原 そこでは、国立大学全体に配分される国の予算の問題になるわけです。要するに国が大学に配分する予算を、いかに増やせるようにするかは戦略が必要になる。元を増やさない限り、個別大学に配分された予算をいじったってしょうがないんです。元を増やすにはどうしたらいいのかということについては、国立大学協会は毎年のように、国に要望書を出しているのです。ただ要望するだけで、しっかりした要求根拠もないし、賛同してくれる世論もなかった。そんな状況では、絶対に増やせないということです。

私が評議員の時、というか、それより前に、組合で予算の勉強をした延長線上で、大学の予算関係を審議する全学予算委員会の委員をずっと務めていたので、大学予算には詳しくあったんですね。そういうこともあったので、もっと国全体、要するに宇都宮大学ではな

くて、国立大学全体の予算を増やすためには、国立大学協会は要望書を出すだけでなく、しっかり要求の根拠を示し、社会に訴えることが必要だと、発言してほしいと、評議会の席で学長にお願いし、学長が国立大学協会の第6常置委員会（予算関係）で発言された。委員の先生方は学長ですけれど、発言の主旨には賛同されたが、誰が責任をもって進めるかが宿題になった。こうした話になると、よく「言いだしっぺ」というか、最初に提案した人が実行するべきということになり、宇都宮大学での「言いだしっぺ」は私ですから、学長から、「田原先生が引き受ければ宇都宮大学で引き受ける」と持ち掛けられ、取り組むことになったのです。その後、第6常置のもとに国立大学財政基盤調査研究委員会が発足され、宇都宮大学が事務局を引き受け、私はその責任者になったのです。ちょっと常識的に考えればわかることだが、地方の小さな大学が全国立大学の財政健全化のための調査研究を担当することは、異例といえば異例で、国大協でも初めてだったのではないのでしょうか。

取り組みの初めから数えれば3年間、幹事役を務め、それまで付き合いのなかった高等教育の財政問題に詳しい研究者との議論だけでなく、文部省や企業の人たちとも話す機会があり、私自身も随分勉強になった。また、いかに大学が厳しい状況かということで、国立大学教員を対象に悉皆調査を行い、現状の厳しさがマスコミを動かし、政治家も動き出すということの中で、一定の改善に向け予算増が計られるなど成果も表われた。要するに本気でやれば、国も動かせるんだなということ、そこで学んだんです。元をただせば、組合での予算の学習会にたどり着くわけです。

佐々木：そうですか、それで連合大学院構想から、FDについても学習会をやったようですがそれはどういうことですか、またたぶん74年の半日ストライキの思い出もきかせて下さい。

田原：そう言われるといろいろ思い出します。宇都宮大で組合の委員長を務めたのは宇大に移ってすぐと学長の就任直前の2回なんですけれど。最初の時は、さっき話した予算の学習だけではなく、連合大学院の問題も出てきた。そもそも連合大学院というのはどういうものなのか、というのは、これは農学部が中心ですけれど、やはり大学全体とも関係しているのではないかと。それなら、工学部とか教育学部の教授会とかではなく、組合こそ議論ができる場ではないかというようなことがあって、学習会をやりました。私は日本科学者会議にも入っていたので、なるべく幅広くということで、連合大学院の学習会も予算の時もそうですけれども、科学者会議栃木支部とタイアップするような形で、広げながらその学習会をやりました。

ずっと後になって、2度目の執行委員長になった頃は、学生の授業評価の問題とFD というファカルティデベロップメントが話題になりつつあったんです。でなぜ組合でやったのかと言ったらですね、大学側がほとんど真面目に考えていない。本来は大学が考えるべきことなんですけど、大学が考えなかったら誰が考えるのかと言ったら、これはまた全学的な問題ですから、組合でやろうということ。いわゆるFDというか、授業のやり方とか学生の授業評価について、何回かシリーズで学習会を開いたんですよ。組合運動とは直接関係ないんですけども、その当時の大学で課題としていろいろ出てきた問題について、大学に文句を言うより、「大学がやらなかったら組合でやる」というようなスタンスで、

組合活動とは直接関係なくても、大学を良くしていくためには、関わっても悪くないなということでやりました。その方が自分の問題として、先生方としても楽しいというか、関心がありますよね。だから結果としては良かったなと思っています。

佐々木：国立天文台の時はストライキの思い出があるようですが。

田原：そうそう、ストライキの話は、私が執行委員長を辞めたすぐの4月(1973年)に半日ストライキの計画があったのです。半日ストライキというのはかなり大規模なことを考えていて、いい加減な取り組みではだめで、組織的に計画を立て準備する必要があるということで、闘争委員会を発足させ、直前まで委員長をやっていた関係で、闘争委員長というようなことになったんです。半日ストライキは天文台だけでやるという問題ではなく、近隣に大学がありますので、その大学と連帯してやろうということになり、天文台のグラウンドを会場に、各大学が集結して開いたんです。その時の記憶はほとんど消えているんですけども、残っているのは、グラウンドの隅に警官が何人も並んでおり、緊張感がありました。集会自身と言うより、国家権力と対峙するという、ある意味の真剣勝負のところもあって、良い経験として記憶に残っていますね。

佐々木：組合の必要性、意義についてはどういうふうに考えていますか、それと関連して今はなかなか組合運動も厳しい状況で、東職や宇都宮大学の組合員が生き生きとして組合運動をやるにはどういうことが大事ですか、さらに言えば組合に入る人が少ないのですが、特に教員は研究に時間がとられているから組合にも入ってこないということで非常に厳しいのですけれども、そういう人達にどういうことを言い残したいですか。

田原：まず、組合に入るのはいいけれど、執行部に入って活動するのはごめんだというのが一般的ではなかったかなと思います。宇都宮大学の時もそうだったんですね。私の場合、執行部と言いますか、特に四役、委員長、副委員長、書記長、書記次長なんですけど、その四役になるような人がなかなかいない。とりわけ執行委員長になる人がいないということが問題でした。執行委員長が決まれば、他ならやってもいいという人がいるからというような状況で、是非委員長を引き受けて欲しいと声がかかったのです。自信があったわけでもないのですけれども、天文台の時も執行委員長をやった経験もあるので、やることは構わないということで引き受けたんです。

組合に入ることの意味ですけれども、国立天文台が研究の場であるのと違い、宇都宮大学の場合は規模も大きいし、教育が中心ということで、組合の性格も違う。ここでは、宇都宮大学のことだけで言うと、それぞれの学部は独立していて、一般的には共通的に議論をしたり話したりという場は、全学委員会以外ではほとんどないわけです。組合はいろんな所とのつながりがあります。組合員になった時の面白さというか、執行部に入っていた時の面白さは、自分の狭い範囲で物事を考えるのではなくて、広い視野で物事を考えることができることです。そういうことが大切なんです。だから、そういう意味で、組合に入っていると活動するということは、自分の研究にも結構役立っているのだと思います。確かに執行部となれば、時間は取られるのですが、そのほとんどは昼休み時間ですから、食事を取りながら皆で話をすれば、特別に時間を取られるわけではない。また、時間というのは作ろうと思ったら作れるんですね。だから、作ればできるという意味では、それほど研究の支障になるという感じはありません。もし支障になるとしたら、本気で取り組ま

ないというか受け身でやっている場合で、そうすると無駄な時間と感じてしまう。主体的に取り組んでいけば充実した時間となり、結構楽しいし、研究と矛盾するようなことはないと思います。

みんな忙しい忙しいとよく言っているんです。それは嘘ではないんでしょうが、忙しさの点でいえば、私は他の先生方に決して引けを取らなかったと思うんですよ。

佐々木：もっと忙しかったのではないですか。

田原：宇都宮大学での仕事と国立天文台の仕事とを掛け持ちでやっていましたので忙しかったのは紛れありません。一般には、忙しいというより多忙感ということで、それが結果として忙しいと言わせているのではなんでしょうか。要するに、時間的に忙しいというより、忙しく感じているということです。その原因は、費やしている時間が自分の役に立っていないとか、充実した時間になっていないからで、そう思ったとたんに、忙しいと感じてしまうのではないかと思います。だから、多忙と言うのは、一般的には言えないとは思いますが。言い訳のような部分もあるのではないかなと思います。それはけしからんという話ではない。主体的に本気で取り組めば、自分なりに時間の調整をうまくやれるはずですよ。一度、本当に忙しい思いをすることによって、能率が上がる時間の使い方が身に着くんじゃないかなと思います。

佐々木：ちょっと話が変わりますけれども、田原さんは国立大学法人化については、その設立当時から危惧を表明したりしていました。最近では鹿児島大学の元学長の田中さん、元静岡大学の学長佐藤さん、宇都宮大学の元学長の田原さん3人で『国立大学法人化と大学の責任』という本を出し、今年また『2040年 大学よ甦れ』という本をお書きになりましたけれども、この持つ意味と言いますか、ここで一番言いたいこと、あるいは最近の大学のありようと言いますか、それらについてはどういう考えなのかお話しください。

田原：これを話すとすれば、その前のことからいろいろと話すことになると思うんですけど。先ほどの組合の話ですが、組合のいいところの一つは繋がりです。この繋がりを持つということが非常に大切なんです。一人でことをなすよりは繋がりでするということが大きな成果に結びつきます。私は国立天文台の時にもそうでしたし、その前の野辺山の電波望遠鏡観測所を作る時もそうでしたが、繋がりの方が成功をもたらすという実体験を持っているので、繋がるということの大切さということは本心から持っていたのです。個人でするというよりか、仲間を作ってやるのが良いというようなことは、ある意味では、組合から学んだとも言えます。

学長になる前から、先ほども話したように、国立大学の財政問題で国立大学協会と言いますか、学長で組織している協会があるんですが、そこで皆がつながって本気で頑張れば、国も動かせるんじゃないかということも実感したんです。

法人化への方向は私が学長になる前にはほとんど決まっていたと思います。当時の多くの大学は法人化の問題よりは、大学の統合再編の問題で頭をひねっていたと思います。宇都宮大学もそうでした。したがって大学自体が法人化の問題に真剣に考えているということはなく、全国的にみても、一部の教授会や組合などが反対声明を出すことはあったものの、あまり広がっていることもなかったですね。2000年の9月ですが、宇都宮大学で文科省の杉野剛大学改革室長による法人化についての説明会があり、話を終えた後、法人化に賛成か反

対か手を挙げてみて下さいと言ったらですね、結構賛成に手を上げていた。それを見て杉野室長は、「私いろんな大学で説明したただけれど、こんなに賛成の人がいるのは宇都宮大学が初めてだと。

佐々木：褒められたんだ。

田原：多分皮肉っぽく。彼は法人化に必ずしも賛成ではなかったのではと思います。私は、彼の説明を聞きながら、新自由主義と言いますか、そういう流れの中で法人化し、それぞれの大学が独立してお互いが競争して本当にうまくいくのか、教育研究の場としての大学にふさわしいのかとすごく危惧していたんですね。

法人化に向けた大きな流れの中で、さっき話した田中先生と佐藤先生は僕よりずっと前から学長をやっておられ、その人たちが国立大学地域交流ネットワークというのを立ち上げられた。地方大学が中心ですけれど、地域交流を通して国立大学を活性化し、その成果をネットワークを通して共有するという、法人化の流れに対して、ある意味ではアンチテーゼ的な大学のあり方を模索する動きがあった。私は学長になる前から、大学が連携しながら皆で知恵を出しあうことに興味を持っていたので、学長に就任したらすぐそれに参加したいと思っていました。宇都宮大学の前学長は参加していなかったのですが、それどころか、関東地区の国立大学長が全員参加していなかったんです。なぜそういうことになっているのか不思議に思い、なぜ参加しないのかと学長に聞いたら、ネットワークに参加すると法人化に反対するグループだという風に文科省から睨まれるのではと思い、参加しなかったと。

当時の大学はそのような状況だったのです。法人化には良い点と悪い点があるけれど、学長の多くは良い点ばかり取り上げて、法人化やむなしというような大勢になっていたんです。その中で、共著の田中先生や佐藤先生は法人化反対の立場を堅持されていたようです。二人から聞いたのですが、2002年4月の臨時総会で、国大協にデビューした新人の私が、長々と法人化の問題点について意見を述べたのでびっくりしたと言っていました。私自身は、法人化に向けた動きを懸念していましたが、就任4か月の間は、意見を表明する機会がなく、4月の臨時総会で、初めて機会が与えられるということで、発言内容も予め準備していたのです。そこでは、国大協の議論は、「今の大学のだめな実情」と「独法化後の幻想的な利点」とを比較して、独法化に賛成という、都合の良いことだけを評価して受け入れている気がする。と発言し、文科省は法人化によって、大学の自主性や自立性のもとに経営できると説明しているが、旧帝大等では生かせるかもしれないが、小さな地方大学では、実質的な自由度がなく、自主性が出せるのか疑問がある。法人化と競争の論理の中でさらに格差を広げる方向に進むこと、教学と経営は不分離というが、教学の方針がしっかりしないと、国からの交付金がもろに影響を受けるのではないか。さらには、評価委員会や学長選考会議等の問題点を指摘し、会長の最終報告については、今総会で承認するのではなく、6月の総会までの間、各大学で説明会を開き、構成員に国大協の方針を理解してもらい、学内の合意形成に努める。それを踏まえて、国大協として正式に6月に承認し、我々の手で創造的に「大学の自治」、「学問の自治」を構築することが問われている

ことを呼びかけ、大学人や国民を鼓舞し勇気づけるようなメッセージを発すべきではないか、と発言した。

法人化後の姿を見ていると残念ながら田中先生や佐藤先生が危惧された通りの動きになっている。と、いって、当時法人化に反対というか問題点を指摘していた人間としては、「指摘した通りになったではないか」と言っておれない。

佐々木：悔恨ですね。

田原：そう、要するになぜあの時にみんなを説得できなかったのかと。もちろん現在のそのような事態になることが分かっていたら説得できたかもしれないけれど、結果として、当時は説得力がなかったんですね。だからそういう弱さというものへの反省もある。なぜ法人化をゆるしたのか。

法人化に強く反対しておられた田中先生が、国立大学法人化に向かった経緯や問題点をまとめ、その出版の是非を佐藤に相談され、それを受けた佐藤先生から私に話があり、とにかく3人で集まって相談することになったのです。田中先生の執念が佐藤先生や私にも伝わり、出版を目指すのであれば、法人化に向けた動きと言う、昔の話に留めなくて、その後、大学の現状がどう変わったか、どこに問題があるのか、さらに、国立大学の改革に向けた国の動きが激しくなったこともあって、それも含めながら、将来への展望も含めて、法人化の問題を総合的に扱った内容にしたのが良いのではないかと、それぞれが分担し作業を進めました。私たちは、高等教育の専門家ではないが、現場の体験者としての生の声、そうした当事者の立場に立った、ものの見方を残した方がいいのではないだろうかということで、荷が重いといえ重かったんですけども。

執筆に取り組み始めて1、2年で大筋書き終えたのですが、全体の見直しや新たな状況の変化も加わり、出版までに3年近くかかりました。

ところが、国からの大学改革に対し、大学が受け身になっている印象を強く感じていたので。大学はもう少し頑張ってもらいたいと思っていました。ほっておいたら、大学は次から次と国からの指示で動かざるを得なくなる。大学は国の指示で動くのではなく、主体的に考えて動くことが必要だということと、前々から言っていた、競争から連携への転換の中で展望が開けるのではないかと、去年から1年間、比較的早くまとまったのが「2040年大学よ甦れ」です。その前にある程度下書きというか、下地があったからですが。この本での私たちのメッセージですが、主体的にとっても、文科省自身が主体的に物事を考えられなくなっている。要するに、内閣府とかそういう政府からの圧力、あるいは財界からの圧力の中で物事が決まって、文科省はそれをいかに実現させるかというような下請け的な形になっていることが見え見えなんです。さらに、大学は文科省からの指示に従ってやっているということも見え見えで、これが、多くの大学で、学長を先頭に、全教職員を疲弊させているのです。

それはそうとしても頑張りたい。何をどうしたらいいんだろうかと考える時のヒントになって、こういう考え方だってあるのか、それだったら、こういうことも考えられる、といった自主的に考える糸口になればいいとの気持ちで、思い切っているいろいろな考え方を書かせてもらったというのが、この『2040年大学よ甦れ』の狙いなんです。ですけれ

ど、ひょっとすると遅きに失しているというか、大学には、考えようとする力自体が失われているのではないかと。

佐々木：一番危険なことですね。

田原：そう、その日その日というか、目先のことしか考えられなくなってしまった。先のことを考えようたって、今をどうするかというような話になってしまう。組合もそうかもしれないが、こうした状況になると、みんなバラバラになってしまうんですよ。大学は大学でバラバラになるし、先生方もバラバラになって、自分中心というか、個々の範囲で物事を考える傾向に、どんどん押し込められてしまっている。そういう危険性を認識しているので、なんとか、もう一度元気というか、とにかく考えてみよう。自分なりに考える中で、やれば案外楽しいことだってあるんじゃないのということに、気づいてほしいという話です。

佐々木：定年退職してから新しい人生を過ごされているわけですがけれども、先ほど聞いた地域の方とか子ども達とか、特に私が聞いて「うーん」と思ったのが、子ども達に実験道具を作って、例えば万華鏡用のガラス粒を自分の台所のガスコンロで作るとか、そういうことを聞いてすごく感動したんですけども、その詳しい内容と、どうしてそういう活動をなさっているのか。それで最後にもう一度組合に帰るのですけれども、組合運動は田原さんの人生、研究生活、学長生活、そしてリタイア後の子どもたちへ理科学習も含めて、どこか通ずるものがあるような気がするんですけども。

田原：これも簡単に言うのは難しい話なんですけれど。

佐々木：子ども達の話の先に。

田原：学長を辞めてからはある意味では暇になったというか、自分の時間を取れるようになりました。いろんな人から声をかけられたということもあるんですけど。なぜ声をかけられたかという、私は先ほどから話をしたんですけども、教育学部に在籍していました。そこでの教育の主目的は教員養成なのです。大学の授業では、ただ単に講義するだけではなく、学生は、楽しい授業でなければ身に入らないと思っていました。だから学生が、この授業は面白いなというように思えるよう挑戦をしてきました。授業方法をいろいろ工夫したり、実験を取り込んだりするのですが、その場合も、普通よくある実験というよりは身近な材料を使って、ちょっと工夫すると非常に面白いことができる。理科の授業なんかもそうですけど、面白さというのは工夫することなのですね。与えられた実験道具を使って実験をやって結果を出すというのは普通のパターンですけども、私は元々そういうパターン化された小学校・中学校の教育というのは本当にいいのかと疑問を持っていたんです。将来、教師になる学生もそういうパターン化だけではなくて、自分でもいろいろ工夫するということが大切だし、そっちの方が面白いんじゃないかというような体験を大学のうちにしてもらいたいなど。

ということで、いろいろ面白い実験なんかを考えて、授業でそれを使っていたので、それを知っていた人が学内におられ、そういう人が学長やめて少し暇もあるだろうと持ち掛けられたのです。その後は、ロコミで、何か面白いことやっているらしい、自分のところでもと広がったんです。

子どもや家族を相手にやっているのですが、先ほど言ったように、お話というよりは実験やモノづくりが中心です。しかも学校とは全然違ったものですから、実験道具は自分で準備する必要があります。私の考えは、人がやっている実験を見るだけでなく、参加者が実際に自分でやってみた方がいい。さらに、自分の学びだけではなく、その学びの面白さというものを、今度は、家に帰って、お父さんやお母さんといった家族相手に試してみる。子どもだけではなく、家族で実験が共通の話題になるというのは、面白いことじゃないかという気がして。ですから実験道具の多くは、お土産として一人ひとりが持ち帰れるようにしたわけです。全ての実験というわけにはいきませんが、例えば一回で最低でも5種類の持ち帰り実験道具を作るとしたら、30人なら30人×5の150の実験道具を作らなくてはならない。

科学教室の多くは子どもが対象ですが、子どもだけでなく、家族相手というのが結構面白い。何が面白いかというと、子どもがやることを傍で親が見ていて、子どもがこんなことができるのかと見直すこともあるし、逆に、お父さんとお母さんをあらためて見直す機会にもなるからです。ということで、家族一緒にサイエンスというようなこともやっているんです。募集を20家族に制限しても、1家族3人とか、場合によっては5人とか来ると、全体で60人とかになるんです。実験道具等、初めは子どもだけだったんですけど、親もやりたいという希望があって、そうすると、ものによっては子どもと親で60人分の実験道具を作らなければならないので、準備するのが大変です。多分現職の先生とかそういう人は忙しくてできません。だからこのようなやり方は、全国的に見ても珍しいんじゃないかと思えます。

なぜそこまでするのか、という疑問があるかもしれませんが、実験道具を工夫するというのが楽しいんです。100円ショップに出かけ、あちこち見ながら、こういうものをこういう風に分解すると、こういうものに使えるんじゃないか。そういう発見の楽しみです。

いろんな人たちと付き合いながら学ぶ楽しさは、組合活動にも通じるところがあると思います。いろんな人の意見を聞きくのは、自分にとってもプラスになるということです。おまけに、一生懸命やった結果、相手の喜ぶ姿に接することも嬉しいことです。

もう一つは、8年前に立ち上げたサークルがあります。私が講師だった宇都宮市民大学講座に参加した有志で立ち上げたもので、会員は高齢者が中心です。サークルの名前は「科学を考える会」ということで、毎月1回の例会と会報を出しています。例会では、私の天文学の話を中心に、広くサイエンスの話をしてはいますが、単に科学の話ではなくて、考えることをテーマにしているので、毎回課題を出し、皆さんに考えてもらっています。

毎月2時間の話をするので、準備が大変なこともあり、他から講師を招くこともしています。会員の入れ替えはありますが、常に40人余の会員を維持しています。特に会費はとっていませんが、例会に出席する度に、500円を徴収していますが、8、9割の出席率です。会員のうち、女性が半分近くおられます。招いた講師も科学をテーマにする会に半数近くが女性というのは珍しいと言っています。しかも皆さん、結構質問するんです。考える会ですから質問は当然かもしれませんが。講師の方も、他の所とは違った雰囲気、出席者が熱心だと喜ばれています。

こうしたことは学長を辞めてからのことなんですけれど、そういうことをやりながら、組合のことを振り返ってみると、私自身は今までも話したように、組合活動の中で得ることが非常に多かった。なぜ得ることが多かったかと言ったら、私なりに、結構楽しんで、それから、ある意味では力を入れてやったということ、そこでやったことがいろんな成果という大げさですけど結びつき、喜ばれている。自分の楽しみにとどまらず、人と自分と喜びを共有できるということも楽しみです。そういう経験というのは組合以外ではあまり得られないですよ。

自分の研究で楽しむということはあっても、なかなか人から喜ばれたり、感謝されることはありません。学長の時ですが、ある先生、その先生は大学外でも活躍されている方ですが、学長室に訪ねてこられ「先生、この前、感謝されました、感謝されたのは初めてですよ」とうれしそうに話すんです。大学の先生が、講演会かなんかお礼されることはあるかもしれないが、医学部のような場合を除けば、あまり感謝されるという経験はないのではないかな。よその人だけでなく、おそらく学生からもそんなに感謝されていないと思いますよ。

佐々木：ええー

田原：要するに、感謝されるという習慣が一般にはないんです。だけど、組合活動なんかをすると、いろんな人から感謝されるようなこともあるんです。別に感謝されるからやるということではないが、結果としてそういうことになるわけですよ。

蒸し返しになりますが、忙しいから組合は無理といろいろ言われていると思うのですが、それでも時間を見つければ、いくらでも時間管理はできるので、あまりそれが負担になるということもない。負担になるというのは負担感ということなんです。要するに忙しいと言う場合、忙しい忙しいと思うと忙しいんです。もっと忙しくても忙しいと思わない人はたくさんいるんです。

私が天文台で勤務していた時、私の上司に森本さんという人がいて、天文台職組の委員長もやっていた人ですが、彼は猛烈に忙しくしている。傍で見ても忙しい男ですけど、誰から頼まれても「はいはい」と断ることがありません。忙しいのにとっても、「いや別に忙しくもない」と言っている。彼の持論で、僕もそう思っていますが、人に物事を頼む時には、「忙しい人に頼め」があります。なぜかと言ったら、暇な人に頼むと、ちょっとでも仕事が増えると、忙しいと思ってしまう。忙しい人は、ちょっと増えたってどうせ忙しいんだから、それが一つ二つ増えたってさほど変らない。1に1を増やすと2倍になるが、10に1ふやしても1.1倍にしかありません。

しかも本当に忙しい人は、パッパッと片付ける。暇があったら、どうでもいいことにこだわり、いくらでも時間をかける。仕事を頼むのだったら、忙しい人に頼めというのは、ある意味では真理だと思います。要するに、忙しいというのは口実みたいなことで、時間管理すればなんとかできるということです。だけれど、ちゃんと考えなきゃいけないことは、自分がそれをやるのが、楽しいかどうかです。楽しくないことだったら多分ダメです。

よく考えれば、世の中には楽しいと思えることは沢山ある。それがあれば、やってみる価値がある。組合ってというのは、楽しめばいくらでも楽しめる場なんですよ。命令されて

やるところではないから、自分でいくらでも楽しくできる場ということだと思うんです。ということで、このメッセージの裏側としては、組合活動というものの概念を、もう少し広げた方がいいというのが私の考えなんです。組合はどのようなものか、どのような活動をする場だと、形にはめた活動をすると、それだけ関心を持つ人が限られる可能性があるんです。組合活動というのは多様な活動ができる場所だが、教授会とかおろいろな委員会は、いずれにしても限られた範囲しかできない。自由に議論する場は少ないのです。

だから自由に議論ができたり、自由に意見を交換したり、しかも違った職階の人と議論し合うことは、一般的にはほとんどありえない。唯一組合がその場ですから、こんな良い機会はないですよ。そこら辺が組合というものの持つある意味の無限といたら大げさかもしれないですけども、無限な活動の場です。それを通して、一人ひとりの人間というか、そういうものを育てていく、自分を育てる場でもあるのだと言えます。それは多分、他では味わえない場だと思います。そのためにも、もうちょっと組合というものの活動概念を広げていくことによって、この楽しい場というものをもっと皆に伝えて欲しい。組合こそ、そういうことができるんじゃないかなという気がします。

佐々木：今日は本当に長い間ありがとうございました。

田原：こちらこそありがとうございました。